翻訳

張竹坡「金瓶梅寓意説」訳注稿

安部浩子

〔抄録〕

『金瓶梅』第一奇書本は、崇禎本系のテキストに張竹坡（一六七〇～一六九八）が批評を施して刊行されたもので、康熙三十四年（一六九五）の序を持つ。巻頭には、謝頤による「序」のほか、「竹坡閑話」「金瓶梅寓意説」「第一奇書金瓶梅趣談」「雑録」「第一奇書非淫書論」「凡例」「苦孝説」「第一奇書目」「冷熱金針」「批評第一奇書金瓶梅読法」が収められ、各回の前に回評、本文に夾批・眉批・旁批が付されている。「金瓶梅寓意説」は、登場人物の名前や地名等に託された寓意を理解することが『金瓶梅』を読み解く上での重要な鍵であることを述べるものである。

キーワード　金瓶梅寓意説、張竹坡、『金瓶梅』第一奇書本、小説批評

はじめに

本稿は、『金瓶梅』第一奇書本の巻頭に収められた張竹坡による評の中から、「金瓶梅寓意説」の訳注を試みるものである。

張竹坡は徐州の人。名は道深、字は自得（又は自徳）、竹坡は号である。彼の生涯を知る資料として、弟道淵による「仲兄竹坡伝」（『張氏族譜』所収）がある。これによると、六歳で詩を賦し、私塾にあがると試験問題をちらりと見ただけですらすら暗誦できた。読書は一目で十数行を読み、特に小説を読む時は枯葉が風に翻るように頁をめくった。科挙は郷試を五度受験したが合格しなかった。『金瓶梅』批評は「『金瓶梅』の筋立ての細密さを知る者は、金聖嘆亡き今、世の中に稀であるから、私がそれを指摘するのだ」と、戸に鍵をかけて十数日で完成させた。金陵（南京）でこれを出版すると、遠近を問わず購われ、来客がひっきりなしとなったが、その版木をおいて北上し、旧友の伝手で永定河の治水に携わった。そのかたわら徹夜の読書を続け、二十九歳の若さで突然血を吐いて亡くなった。[1]

「金瓶梅寓意説」は、登場人物の名前、地名、物名等に託された寓意を理解することが、『金瓶梅』読解上の重要な鍵であることを述べる。この作品解釈の手法は、批評史上「索隠派」の先駆と見なされることがある一方で、[2]内容に牽強付会なところがあることもいわれている。[3]ともあれ、張竹坡の批評法の全体像を理解するためには、これを把握しておくことはやはり必要で、意味がある。これが、今回この文章を訳出しようと考えた理由である。本稿は底本として『彭城張竹坡批評金瓶梅第一奇書』[4]（以下底本と略す）を使用している。訳文は大方の意を伝えることを第一としたため、かならずしも逐語訳とはなっていない。読みやすさを考慮し原文にない表現を補った箇所、該当する事象や物語が記述されている回数、簡単な注釈は丸括弧（　）で、音の類似等により通じさせて解釈していると思われる漢字は角括弧［　］で示した。訳注で本文に触れる場合も、上記底本による。

「金瓶梅寓意説」訳

小説というものは、寓言である。[5]小説はある一人の人物を捏造したり、ある一つの事を幻造したりするが、（そのように）虚構とはいえ、また山に依って石を点じ、海を借りて波を揚げるというように必ず基づくところがある。だから『金瓶梅』という一冊の書物の中に、知られた人は百人以上登場するが、その来歴を探求すると、大半は皆寓言に属する。従って物によって名をつけ、名前にある事柄を託して、この曲折の多い百回にわたる書物を作ったと言ってよいだろう。西門慶・潘金蓮・王婆・武大・武二のように、『水滸伝』の中にもとからいた人物で、『金瓶梅』にそのまま登場する人物については論じない。それではなぜ瓶（李瓶児）と梅（春梅）とがいる（登場する）のか。瓶（李瓶児）は慶（西門慶）から発想された人物である。思うに欲を貪り悪を嗜んだために、体中が枯れ尽くしたとは、瓶が罄きた［慶・罄］ということである。[6]わざわざ瓶児という登場人物を創作して、昔からの風流な人を同声一哭させようというのである。瓶に（人の）情を持たせるならば、花瓶の場合は子虚の姓は花となり、銀瓶の場合は銀姐（呉銀児）の名は銀となる。（また）瓶は屏に通じるので、春を窺う（色事を覗き見る）には必ず隙間からする。[7]屏は芙蓉を号とするので、[8]「玩賞芙蓉亭（芙蓉亭にて玩賞する）」は思うに瓶児のために入れ込まれた一段である。[9]そして「私窺（ひそかに窺う）」の回（13回）の冒頭の詞の中で、「綉面芙蓉一笑開（綉面の芙蓉一笑開く）」と言うことになる。[10]その後「玩灯（灯籠を玩賞する）」の回（15回）の「灯賦」の中で、荷花灯・芙蓉灯と言う（のも同じである）。思うに金（潘金蓮）と瓶（李瓶児）とを合せて伝を作り、瓶から屏が連想され、また屏から芙蓉が連想され、（そのようにして）徐々に物語が進行して（第百回の普静和尚による）幻化に向うのである。[11]屏と風の二字は相連なるので、馮媽媽［馮・風］がいつも瓶児に付いていて、まさに大理石の屏風（45回）に相当し、また画龍点睛の妙筆である。芙蓉を植えるのは正月、艶やかな見頃は中秋、花が散るのは九月である。従って瓶児も正月十五日に生まれ、八月二十五日に嫁ぎ、[12]後に重陽のころに病（が重篤）になり（61回）、死ぬのは十月でなければならないが、[13]（このように李瓶児の一生は）すべて『芙蓉譜』[14]内の時候に

合っている。牆の上の物が取り去られてからは、（西門慶との）婚事が遠のいたので、瓶児は（西門慶と関係をもったことを）悔いた。[15] 従って蔣文蕙（蔣竹山）とは悔いを聞いて来た者である。[16] しかし（蔣竹山は）結局のところ瓶児が頼れる人ではなく、必然的に追い払うこととなるから（19回）、また竹山と号するのである。[17]（これは）すべて瓶児の心の迷いによってこの一人（の男）が現れたのである。如意は瓶児の後身であるので、熊氏で姓は張である。熊で珍重されるのは胆であるから、如意はつまり瓶（李瓶児）の胆の一枚である。だから瓶児が倒挿花（女性上位）を好み（16回）、如意が「茎露独嘗（フェラチオ）」を好むのは、いずれも瓶（李瓶児）と瓶胆（如意）との本性の現れである。[18] 官哥はその名の意味がぼかされているが、官窯の「官」であり哥窯の「哥」で、だから雪賊（潘金蓮の飼い猫雪獅子）が官哥を死なせている（59回）。瓶は猫の襲撃にあって、どうして割れないことがあろうか。「銀の釣瓶が井戸に墜ちる」のように、（淫奔による女の不幸は）古来人の心を痛ますもので、着物を脱いで瓶児は死ぬこととなり、[19] 夢枕に立つのは何家に於いてでなければならない（71回）。銀瓶は（糸が切れて）水を失い、（かといって）竹籃に水を汲んでも何の益があろうか。[20] だから何家の藍氏を持ち出して（西門慶の）意中の人として（78回）、（西門慶が藍氏に手を伸ばす前に）西門（慶）を死なせているのも、また瓶（李瓶児）の余意である。[21]

梅（春梅）はといえば、これまた瓶（李瓶児）から生ずる。なぜならば、瓶の中の梅花は春光幾ばくもなく、[22] 瓶が罄きるとは骨髄が知らず知らずのうちに枯れることの喩えであり、瓶の梅（春梅）もまたすぐに枯れることの喩えである。梅（春梅）雪（孫雪娥）相下らず（互いに負けておらず）、[23] 故に春梅が寵愛されて雪娥は辱められ、春梅が正位について雪娥はますます辱められる。[24] 月（呉月娘）は梅花（春梅）の主人だったので、永福寺で再会した時、もとの（昔の）主人と言ったのである（89回）。呉典恩の事件では、春梅に助けられる（95回）。冬の梅は奇寒に脅かされても、春になって一息つく。だから（西門家を追い出される時）「不垂別涙（別れの涙を流さず）」であった（85回）。つまり作者は人生の浮沈に対する満腔の痛恨の思いを筆端に込めているのである。[25]（周秀の）周と舟とが同音であることに至っては、春梅がこれに嫁ぎ、花を載せる舟となったのである。（しかし）秀と臭とは同音なので、春梅は悪名を流して花を載せる舟は汚穢舟にならんとし、[26] そして周義は「野の渡し場に人無し」のように、中流で漂う虚舟となった。[27] だから永福寺で普浄（普静）和尚の前に周義が現われて高留住なる者に生まれ変わるのは（100回）、ひと棹の舟を留めて、はじめて彼岸に至ることができることを言っているのである。[28]

とすれば金蓮も、やはり全く寓意が無いわけではあるまい。蓮と芰（ひし）は同類である。（一方、陳敬済の）陳は旧であり、敗（枯れる）である。敬と茎は同音である。[29] 茎が枯れた芰荷（ハス）とは、蓮（潘金蓮）の末路について言っている。故に金蓮は敬済によって身を亡ぼすのである。[30]（陳敬済は）僥倖を得て金蓮を手に入れるが（28回）、（これは）陳敬済（と潘金蓮の不義密通）の罪である。（本来はこの二人が罰せられるべきところ）西門慶は「打鉄棍（鉄棍を打つ）」が（28

回）、鉄棍は陳敬済の影にすぎない。（西門慶が）根を捨てて影を罪とするのは所謂（責任を）あいまいにするものである。[31] 枯れた茎（陳敬済）は風霜に耐えられない。だから厳州に行ったのだが、鉄の爪（楊二郎）に折られて、たちまち（罪に）下ることとなる。[32] 幸いにも徐尉によって救われるのだが（92回）、風が少し強かったらすぐに吹き飛ばされただろう。[33] その後の過街鼠（張勝）の見回りは、本当の北風である。[34] 風は刀のように鋭く、刀は風のように鋭く、残枝敗葉（陳敬済）はどうして粉々に砕けないことなどあろうか。[35] 陳敬済の父である陳洪は、まさに「露は蓮房に冷ややかにして墜粉紅し」だし、陳敬済の叔父である張団練は引っ越してしまって（88回）、まさに「荷尽きて已に雨を擎くるの蓋無し」で、[36] この枯れた茎（陳敬済）だけが風雨に立ち向かわねばならず、すべて蓮（潘金蓮）にとって耐えられない状況を書いたものである。（このような場面を見れば）益々もって夏龍溪は金蓮が上り調子の時の人だとわかる。[37] （これに対して）温秀才から水秀才、さらに倪秀才［倪・泥］、またさらには王潮に至るまで、すべて水が枯れて蓮がしぼみ、茎や枯れた葉が数本だけ汚泥にまみれていることを言っており、所謂風流のことは振り返って見るにたえずで、金蓮が下賤の輩に辱められることを描写しているに他ならない。[38] 蓮の名は金蓮で、瓶もまた名が金瓶であるので、侍女が金を盗んで、蓮（潘金蓮）と瓶（李瓶児）は互いに嫉みあい、[39] 金をかけてかるた遊びをした際は、蓮花（潘金蓮）は形無しとなるが、（その後も）陳敬済は（潘金蓮と）密通を続けるのだ。[40] この他に宋蕙蓮・王六児というのは、またすべて金蓮のために書いたのである。金蓮だけを描いたのでは、金蓮の悪を（描き）尽くせず、さらに西門（慶）・（呉）月娘の悪を（描き）尽くせないので、まず宋蕙蓮を描き、さらに王六児を描いているのであり、[41] （彼女らは）すべて第二第三の潘金蓮である。しかし蕙蓮とは荻の簾のことである。看板が落ち、簾が落ちるように、（宋蕙蓮は）恥じて自縊した。[42] （これは潘金蓮が）叉竿で簾を掲げる回（2回）の渲染（強調する手法）である。王六児に至っては、また黄蘆児（黄色い蘆）の別音で、その実家の母は王母猪である（81回）。黄色い蘆は黄色い竹［竹・猪］と似ていて、王六児の弟の王経はまた黄色い蘆の茎の意味である。蘆の茎や葉はすべて後が空ろなので、だから王六児は後庭花（アナルセックス）を好むが（38回）、（これは）またついでに面白味を出したものだ。蘆にもまた影がある。だから燈籠見物の夜にやはり鉄棍によって（西門慶との）色事を覗き見されている（42回）。つまり蘆（王六児）と荻（宋蕙蓮）とは何れも蓮（潘金蓮）の添え物であって、だから二人は何れも金蓮のために描かれていると言うのである。これが（『金瓶梅』が）金を描き、瓶を描き、梅を描く（に用いた寓意の）概略である。

もし月娘が月だとすれば、あまねく諸花を照らすだろう。中秋の頃に生まれたので、故に桂児（李桂姐）を（義理の）娘とする。[43] 「掃雪（雪を掃いて）」月娘が喜び、「踏雪（雪を踏んで）」月娘が悲しむのは、[44] 月に曇晴明暗があるからである。しかも月下に簫を吹くということで、玉簫（月娘の女中）を使っている。[45] 月が満ちれば兔が肥えるが、[46] （月は）満ちれば必ず欠けるので、小玉が（玳安と）結婚すると、すぐに平安が金めっきの釣り手を盗んで南の盛り場で遊ぶ（95回）。思うに

南の盛り場で月が金の釣り手を照らしたので、（月が）欠けるだろうとわかるのである。[48] 後に雲裡守が（月娘の）夢に入って来るのは（100回）、月が雲に遮られ、小玉もそれに従って、兔もろともに姿を隠したということで、[49] 内容と表現ともに極めて明白である。

李嬌児は「桃李春風牆外枝（塀の外に顔を出して風に揺れている桃李の枝）」である。[50] その弟の李銘とは、中が明るくて外が暗いことを言っており、[51] お笑いである。賁四嫂と林太太に至っては、葉が落ちて林は空しく、春光はすでに去った（ことを言っている）。[52] 賁四嫂の姓は葉で、「帯水戦（水合戦）」を行っている（77回）。西門慶が賁四嫂の家に行く時にいつも小者の王顕に言いつけるのは（77回）、裏では水に落ちて黄色くなった一枚の葉を言うのである。[53] 林太太も文嫂の仲立ちで（西門慶と）密通している（69回）。文嫂は捕衙庁の前に住み、その娘は金大姐といって蜂の官庁の中の一匹の黄蜂で、[54] 世に言う蜂媒（色事の仲人）である。この時（鄭）愛月は初めて（西門慶の）寵愛を得（59回）、二度雪を観賞し（67・77回）、雪と月が寒さを争い、空林に葉が落ちたのは、蓮花（潘金蓮）や芙蓉（李瓶児）はどうして耐えられようか、である。[55] よって瓶（李瓶児）は死に、蓮（潘金蓮）は辱められ、ただ春梅一人のみが香を争い艶を吐く（艶やかさを競う）のであった。春鴻・春燕は、また時間が早く過ぎることを喩えたもので、鴻を送ったかと思うとすぐに燕を迎える季節となり、[56]（時間に）一瞬の停滞もないことを喩えている。来爵は来友を改名したもので（77回）、（そこから）花の見頃は終りに近づき、燕や鶯が恨むのがわかるのである。[57] その妻恵元は、三友が花園に集まり、ホトトギスが鳴いて血を吐くのを見るのである。[58] 内では玉簫が春風を引き留め（色事をとりもち）、外には玳安が消息を伝え、簫には合歓の曲があるので、蕙蓮・恵元（との密通）には玉簫を用いるのである（22・78回）。簫には離別の音色があるので、「三章の約」とは、陽関の曲なのであった。[59] 西門（慶）がこれを聞けば、深く悲しまずにはいられまい。[60]（西門慶は）遊郭に遊びに行く時、必ず玳安を使っている。「嬉遊胡蝶巷（胡蝶巷に浮かれ遊ぶ）」（50回）とか、また「密訪蜂媒（秘かに仲人を訪れる）」（68回）というからして、（玳安は）明らかに蝶の使いであり、いわゆる玳瑁斑花胡蝶（べっこうまだらの蝶）ではなかろうか。[61] 書童は簫に因んで名ができている。[62] 思うに作中に月を書き、花を書き、雪を書く時、すべて一人の人の名に定めている。（例えば）風ならただ馮媽媽だけに止まる。太守の徐尉［尉・風］もまた（風を寓意する）一人ではあるが、（徐尉は）色事には関係ない、まともな役柄である。[63] 書童を玉簫に配しているから、蕭条とした風が起こるのであり、[64] 最後には必ず「私挂一帆（ひそかに舟に帆を上げる）」（64回）となるのであって、意識的に風を写していることがわかる。しかしまた書を梳（くし）に通じさせていて、書童は蘇州府長熟県生まれであるので、その字義は見当がつくのである。[65] 客に媚びて歌う時には必ず「画損了掠児稍（髪を梳きすぎてくしの歯が欠ける）」と言い、[66] 引き続いて「賁四害怕（賁四が怖がる）」と言う。[67]「梳子在座、篦子［賁・篦］害怕（くしが席にいれば、すきぐしは怖がる）」というわけで、[68] 絶妙である。（西門慶は）『艶異編』の遺志で、お小姓（書童）のために仇を打っている。[69]（そこで）金蓮が「打了象牙（象牙を叩く）」と言うのは

（35回）、明らかに象牙の櫛を指している。[70] 瓶児の喪の内に（人々は）去って行き、瓶は落ちて簪は折れ、象牙の櫛は衰え、蕭条とした風が起こり、春は終りに近づき、「陽関三畳（別れの曲）」となって、（登場人物は）皆退場しようとするのである。[71] 以上が『金瓶梅』の寓言の概略であり、その他のことは述べ尽くすことはできないが、以上のことを類推すれば、すべて同様である。

玉楼の描き方に至っては、作者の経世済民の学問の表れで、さまざまな事柄について周到に自分自身を喩えている。[72] 試みにこれを細かく言ってみると、玉楼の簪に「玉楼人酔杏花天」[73] と彫り込んであるが、楊家から来て（7回）、のちに李家に嫁ぎ（91回）、薛嫂に遇って辛いしうちを受け（7回）、陶媽媽に遇って気を吐いていることからして（91回）、彼女は明らかに杏であることは疑いない。[74] 杏は、幸である。身も名もボロボロになるが、（李衙内に嫁ぎ）幸いにも残りの人生を無事に過ごす。（孟玉楼が）かつて臭水巷に住んでいたとするのは、思うに予期せぬ不幸（夫楊宗錫の死）から、こうした悲惨な目に遭い、汚辱忍び難いことを言っているのだろう。[75] だから作者もこの小説を書いて鬱憤を晴らそうとしているのだ。[76]（後に孟玉楼が）李衙内に嫁ぎ、李貴が李衙内に随って登場し（90回）、李安が李貴を頼って行くのは（99回）、理［李・理］を貴しとし、理を安しとしたからである。（孟玉楼は李衙内の故郷の）真定（府）棗強（県）に帰るが（92回）、真定は、自分の心の落ち着いたこと言い、棗強は、努力修練のことを言っている。物事を行うには焦って助長しようとしてもいけないし、忘れてしまってもいけないので、[77] これぞ作者の学問である。王杏庵は貧児（陳敬済）を晏公廟の任道士のもとへ送り弟子とさせた（93回）。晏とは安であり、任は人に通じ、また仁に通じる。その言うところは「私がもし志を得るならば、必ずや仁道をもって天下を済い、天下の匹夫匹婦をして、皆安楽に暮らし、生命を養い、道徳を守り、（善なる）性を回復させたい」で、[78] これぞ作者の経世済民である。思いがけず金道士が陳敬済に男色を迫り、また陳三が陳敬済を（廓に）引き入れるのは、今の人は色と金に目がくらんですでに久しいので、こちらが一生懸命教え導こうとしても、今はまたすぐにその本来の性を失くしてしまうから、救いようがない（ことを言うのである）。[79]（そこで作者は）まとめて永福寺に持って行き、孤魂（供養する人もない霊）としたのである。悲しむべきことである。そもそも永福寺は、腹の下に涌く（という意味を表す）が、これはいったい何か。永福寺の中の僧は、一人は胡僧といい、また道堅といい、一人はその形をかたどり、一人はそれ美しく言っただけだ。[80] 永福寺は本当に人を生み人を殺す門で、だから死後はみな同じく永福寺に帰ってくる。（これによって）色欲の恐ろしいことがわかる。そして（永福寺の）万廻長老とは、廻腸である。[81] この他にも黄龍寺とは、脾であり、相国寺とは、相火である。[82]（東京の）相国寺で（智雲）長老にあいさつし（70回）、帰路に黄龍寺で風を避けるのは（71回）、相火が起こって、脾風を発したこと[83]を言っていて、だから西門慶が死ぬ時に牛がうなるような声を出したのであり（79回）、すでに前もって東京（行きの一段）でこのことを言っているのである。玉皇廟は、心である。二重の殿閣の後ろに一重の側門があるのは、まだその心に問えるということであろうか。だか

ら呉道士は十人の義兄弟の契りを取り仕切るが（1回）、その心そのものが道からはずれている以上、契りを結んでも何の益があろう。[84]（『金瓶梅』が）玉皇廟から始まり永福寺で結ばれているのは、この理由からである。

さらに一つの寓意によって数名の人が登場することがあるが、（これらは）その数名で一つの意味を持っている。例えば車（扯）淡、管世（事）寛、游守（手）、郝（好）賢（閑）、（この）四人は一つの寓意である。[85]また李智（枝）、黄四の如きは、梅と李とが黄色くなり、春光はすでに暮れたという意味で、二人で一つの寓意である。また「帯水戦」の回では、先に聶（捏）両湖、尚（上）小塘、汪北彦（沿）のことを言っているのも、三人で一つの寓意である。[86]また安忱（枕）・宋（送）喬年は、色欲で体を損なうことを喩えていて、二人で一つの寓意である。[87]また一人の人によって数名の人が作り出されることもある。応伯（白）爵（嚼）字は光侯（喉）、謝希（携）大（帯）字は子（紫）純（唇）、祝（住）実（十）念（年）、孫天化（話）字は伯（不）修（羞）、常峙（時）節（借）、卜（不）志（知）道、呉（無）典恩、雲裡守（手）字は非（飛）去、白頼光字は光湯、賁（背）第（地）伝、傅（負）自新（心）、甘（乾）出身、韓道（搗）国（鬼）である。[88]（これらは）西門慶の不肖によって、作り出された数名である。また物に因って名づけられた者もいて、例えば呉神仙とは、鏡であり、名は無奭で、冰鑑（鏡）が人を照らせば過りがないのである。[89]黄真人は、土である。瓶は落ちて簪は折れ、黄土が心を傷めるのである。[90]末に楚雲の遥影を持ち出しているのは、まさに彩雲は散り易いということである。[91]潘道士は、まとめる人である。[92]死の罪業が完成して、それらを一つにまとめるのである。またついでに一つ冗談を言うと、西門慶の父の名は達で、お国なまりであることは明らかだが、西門の達とは、すなわち金蓮が「達達」と呼ぶ、その達のことである。[93]ではそのお母さんの姓は何かと尋ねるならば、きっと娘（お母さん）氏と言うだろう。李桂姐は丁二官を客としてとるが（20回）、（丁二官とは）打丁の人である。[94]李（裡）外伝とは、（簡単に秘密の）話を人に伝えるという意味である（9回）。侯林児とは大きな木が倒れればサルは逃げることである。[95]これらはみな趣向を変えて面白味を出したものだ。張好問や白汝晃（謊）の類は、[96]枚挙にいとまがない。時に応じてその寓意を悟るべきで、これらのすべてから作者の狡猾な才能を見ることができる。

さて玉楼が阮咸を弾き、愛姐がその後を継いで、阮咸を抱いて湖州の何官人の家に行き、（最終的には叔父の）二搗鬼（韓二）を頼って生を終えている。[97]これは作者が途に窮し涙の流しようが無くて、愛河の中でこの一篇のたわごとをこねあげたということである。[98]（作者は）明らかにどうしようもない中で、この書物（『金瓶梅』）を書くことで憂さを晴らしたのである。[99]第百回で孝哥を結びとし、普浄（普静）和尚によって幻化されることとしているのは、ただ孝のみがよろずの悪を消し去ることができ、またただ孝のみが子孫に永く恵みを賜わるのだと言うのである。[100]今孝を全うできないとしたら、あるいはかつて自分が自分の親に対してどうだったかを反省したとしたら、どうであろうか。[101]千秋万歳にわたって、この（孝を全うできない）恨みは綿綿と

して尽きることなく、悠々たる蒼天は果てしない。[102] 悲しいことだ、悲しいことだ。作者の意趣は、[103] 文螺（模様がある巻貝の一種）のように曲折し、頭髪のように細密だ。思いがけず後に張竹坡がいて、これを細かく指摘するのである。作者は黄泉の国で涙を流して竹坡に感謝するだろう。また竹坡も酒をくんで、天下の優れた才人に告げねばならぬ、私の説くところは作者の意趣を明らかにしているのであると。竹坡は彭城の人で、十五歳で父を亡くした。[105] この十年、俗世間をさまよい、さまざまな苦労を嘗め尽くし、旅に倦んで帰ってきたが、以前親しかった知友は、[106] みな赤の他人となっていた。じっと「床頭に金尽く」の語を考えると、[107] 何とも楽しまない。（ちょうどそのような時に）たまたま『金瓶梅』の最初に、「肉親や友人に疎んじられ、姿形はみすぼらしく、青雲の志はすっかり消え失せた」と言っているのを見て、[108] 思わず大粒の涙を流した。そこで机をたたいて言うには、「そういうこともある。冷熱真仮（の交替）は、私を欺かない」と。[109] そこで意を決して、乙亥年（一六九五）正月七日に批評を始め、本月二十七日に至って完成した。[110] その中には粗略なところも多いが、しかし私の見方は古人が意図したところを照らしていると信じて、（上述のとおり）その秘密のおおよそを伝えるのである。寓意説を書いて、これを巻頭に置く。

注

（1）張竹坡の生涯と家系については、吳敢『張竹坡與《金瓶梅》研究』（文物出版社、二〇〇九）に詳しく、「仲兄竹坡傳」も収録されている（同書二四六～二四九頁）。

（2）王運熙・顧易生主編『中國文學批評史（下巻）』（上海古籍出版社、一九八五）三六一頁。

（3）魏子雲『金瓶梅審探』（臺灣商務印書館、一九八三）八十八頁、林崗『明清之際小說評點學之研究』（北京大學出版社、一九九九）一二九頁、王運熙・顧易生主編『中國文學批評史新編』（復旦大學出版社、二〇〇一）三六七頁等で言及されている。

（4）『彭城張竹坡批評金瓶梅第一奇書』、新加坡南洋出版社、二〇一七。大連図書館蔵（恭王府旧蔵）の本衙蔵板翻刻必究本（王汝梅氏はこの本を第一奇書本の初刻本と推定している）の影印本である。丁面が欠失している場合は、張青松蔵本、吉林大学蔵の本衙蔵板翻刻必究本などで補い、その都度注記されている。底本は、巻頭の評では各評ごとに、各回では回評と本文とでそれぞれ丁を改めている。

（5）原文「稗官者、寓言也」（金瓶梅寓意説（以下寓意説と略す）一丁表）。『漢書』「藝文志」の「小説家者流、蓋出於稗官」によると思われる。なお、以下、原文引用部分の字体は底本のままとする。ただし、ユニコードにない字体の場合は近似の字体を使用した

（6）原文「蓋云貪慾嗜惡、百骸枯盡、瓶之罄矣」（寓意説一丁表）。『詩經』「小雅・蓼莪」に「缾之罄矣、維罍之恥」とあり、缾の水が尽きることを親の死に喩えている。

（7）第十三回回目は「李瓶姐墻頭密約　迎春兒隙底私窺」である。

（8）芙蓉の花の模様の帳は閨房の喩えとして用いられる。白居易「長恨歌」にも「雲鬢花顔金歩搖、芙蓉帳暖度春宵」とある。

（9）原文「玩賞芙蓉亭、蓋爲瓶兒揷筍」（寓意説一丁裏）。第十回回目は「義士充配孟州道　妻妾玩賞芙蓉亭」。「批評第一奇書金瓶梅讀法」（以下読法と略す）十三則に「讀『金并』、須看其入筍處」（并は瓶の略）とある（読法三丁裏）。

（10）「綉面芙蓉一笑開」（寓意説一丁裏）とは、李瓶児の顔を指す。

（11）原文「蓋金瓶合傳、是因瓶假屏、又因屏假芙蓉、浸淫以入于幻也」（寓意説一丁裏）。読法三十四則では次のように述べている。「『金瓶

梅』是一部『史記』。然而『史記』有獨傳、有合傳、却是分開做的。『金瓶梅』却是一百回共成一傳、而千百人總合一傳、内却又断断續續、各人自有一傳。固知作『金瓶』者、必能作『史記』也。何則。既已爲其難、又何難爲其易」（読法十四丁裏）。

（12）李瓶児は第十九回で八月二十日に輿入れし、第二十回で八月二十五日に親戚と顔合わせの宴が開かれている。

（13）第六十二回に、九月十七日に息を引き取り、十月十二日に出棺するという記述がある。

（14）『芙蓉譜』については未詳。

（15）原文「墻頭物去、親事杳然、瓶兒悔矣」（寓意説一丁裏）。「墻頭物」とは、李瓶児と西門慶が逢引きするために牆にかけられていたはしごを指すものと思われる。花子虚の屋敷と西門慶の屋敷は隣り合っており、李瓶児と西門慶は牆にはしごを架けて逢引きしていた（13回）。花子虚は一族の者から遺産分割に関して訴えられ、土地や屋敷を売って分配することとなる。屋敷は西門慶が買い取り、花子虚と李瓶児は獅子街へ引っ越して行く。まもなく花子虚は死に、西門慶は李瓶児の輿入れの日取りを決めるが（14回）、娘婿陳敬済（詞話本では陳経済）の親戚が弾劾され西門慶にも累が及びそうになったため、李瓶児の輿入れは一時中断してしまう。その間に李瓶児は病気となり、西門慶と関係を持ったことを後悔して、医者の蔣文蕙（蔣竹山）と結婚している（17回）。

あるいは、「墻頭物去」は、夫の花子虚が一族の者から遺産分割に関して訴えられたことから、李瓶児が花家の財産を西門慶に渡し、多くの財物が牆越しに西門家に運び込まれた（14回）ことを指すと理解できるかも知れない。その場合、原文は「塀から物が持ち去られて、（西門慶との）婚事が遠のいたので、瓶児は（先に財物を渡したことを）悔いた」と訳されよう。なお、第十六回回評に「一時高興、將家私盡寄出去、其意謂子虚不死、我不過相隔一墻、財物先去、人可輕身越墻而過矣、及一旦子虚身死、乃深悔從前貨落人手、此際不得不依人項下、作討冷熱口氣也」（回評一丁表）、第十七回回評に「寫瓶兒卽中竹山之計中者、見得瓶兒數日追悔已久。卽未有竹山之讒、久已心中深恨墻頭之物輕輕脱去」（回評二丁表）とある。

（16）原文「故蔣文蕙將聞悔而來也者」（寓意説一丁裏）。「蔣文蕙」と「將聞悔」を通じさせている。

（17）原文「然瓶兒終非所據、必致逐散。故又號竹山」（寓意説一丁裏）。「竹山」と「逐散」を通じさせている。

（18）原文「如意爲瓶兒後身、故爲熊氏、姓張。熊之所貴者、膽也。是如意乃瓶膽一張耳。故瓶兒好倒挿花、如意「莖露獨嘗」、皆瓶與瓶膽之本色情景」（寓意説一丁裏～二丁表）。第七十五回に如意の本名は章四児で、かつて熊旺という男の女房だったとあり、「章」と「張」を通じさせている。第七十八回回評に「如意兒夫家姓熊、娘家姓章、夫熊有膽者也。蓋如意兒、乃瓶中一膽、故名如意、而姓章、猶言瓶膽一張。又膽瓶春水浸梅花、故莖露獨嚐也」（回評一丁裏）とある。「梅花」は春梅を指す。注(22)参照。「瓶膽」については、李瓶児の胆と瓶の胴との両方の意味で捉えられている。第七十八回回目は「林太太鴛幃再戰　如意兒莖露獨嘗」。

（19）原文「銀瓶墜井、千古傷心。故解衣而瓶兒死」（寓意説二丁表）。白居易「井底引銀瓶」に「井底引銀瓶、銀瓶欲上絲繩絕。石上磨玉簪、玉簪欲成中央折、瓶沈簪折知奈何、似妾今朝與君別」とある。「井底引銀瓶」は男女のみだらな関係を止めようとする詩歌。「解衣而瓶兒死」は前後の関係から、李瓶児が西門慶との浮気に走ったために不幸な死に方をしたことを言うと思われる。第四十五回の回目が「應伯爵勸當銅鑼　李瓶兒解衣銀姐」であることや、第六十二回で李瓶児が死んだ時、紅綾の乳あてを身に付けているだけだったことを連想している可能性もある。

（20）原文「銀瓶失水矣、竹籃打水成何益哉」（寓意説二丁表）。「銀瓶失水」は白居易「井底引銀瓶」の「銀瓶欲上絲繩絕」によると思われる。注(19)参照。「竹籃打水成何益哉」については、「藍」と「籃」を通じさせている。

（21）原文「故用何家藍氏作意中人、以送西門之死、亦瓶之餘意也」（寓意

説二丁表）。第七十八回回評に「忽又寫一藍氏、也是太監姪兒之妻也、有錢、儼然又一瓶兒。蓋花籃亦可載花、花瓶亦可載花、而無如籃在何家。何者、河也、竹籃打水、到底成空、總是一番虛景」とある（回評三丁表）。また藍氏に関して第七十八回及び第七十九回中の夾批で「瓶兒後身」と評されている（第七十八回本文三十丁表、第七十九回本文二丁裏）。

(22) 原文「瓶裡梅花、春光無幾」（寓意説二丁表）。第七回回評に「瓶梅爲無根之卉也」（回評二丁表）、「而金瓶中之水、能支幾刻殘春哉」（回評三丁裏）とある。瓶中の梅花は根が無いので美しい花の盛りを長く保つことはできないという意味だと思われる。

(23) 春梅と孫雪娥は第十一回で喧嘩をするなど、西門家にいた時から仲が悪かった。春梅と孫雪娥の関係について第七回回評に「以雪娥爲言者、見得與諸花不投、而又獨與梅花作祟、故與春梅不合、而受辱守備府、是又作者深恨歲寒之凌冽、特特要使梅花翻案也」（回評五丁裏）とある。

(24) 第九十回で公売に付された孫雪娥を春梅が買って周守備府の飯炊き女としたことや、第九十四回で春梅が孫雪娥を売って娼妓としたことを指すものか。注(23)参照。

(25) 第八十九回で呉月娘と春梅とが永福寺で再会した場面で、月娘が春梅に「姐姐、你自從出了家門在府中、一向奴多缺礼、没曾看你、你休怪」とあいさつした直後の夾批に「炎凉悪氣一吐」と、春梅が「好奶奶、奴那里出身、豈敢説怪」と応じた直後の夾批に「不垂別涙、此時反欲垂涙矣」（本文十丁裏）とある。

(26) 原文「秀臭同音、春梅遺臭、載花舟且作糞舟」（寓意説二丁裏）。第百回で春梅が周秀の下男周義と密通し腹上死したことを指すものか。

(27) 原文「而周義乃野渡無人，中流蕩漾」（寓意説二丁裏）。韋應物「滁州西澗」に「春潮帶雨晚來急、野渡無人舟自横」とある。

(28) 原文「言須一篙留住、方登彼岸」（寓意説二丁裏）。「高」と「篙」を通じさせている。

(29) 「敬」は去声、「莖」は平声で声調が異なる。

(30) 原文「敗莖芰荷言蓮之下場頭。故金蓮以敬濟而敗」（寓意説二丁裏）。第八十二回回評に「陳敬濟者、敗莖之芰荷也。陳者、舊也、殘也、敗也。敬、莖之別音。濟、芰之別音。蓋言芰荷之敗者也。金蓮者、荷花也、以敬濟而敗、則敬濟寔因敗金蓮而寫其人、非爲敬濟寫也」（回評一丁裏～二丁表）とある。

(31) 原文「倖僥得金蓮、芰莖之罪。西門乃打鐵棍、鐵棍芰莖影也。舍根而罪影所謂糊塗」（寓意説二丁裏）。第二十八回回目は「陳敬濟徼倖得金蓮　西門慶糊塗打鉄棍」。王汝梅校注『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』（吉林大學出版社、一九九四。吉林大学蔵の本衙蔵板翻刻必究本を底本とした排印本）では「陳敬濟僥幸得金蓮　西門慶糊涂打鐵棍」とする。「芰莖」は誰を指すのか解りにくい。明らかに陳敬濟を指すと思われる用例がある一方で（注(32)参照）、下文に王六児と潘金蓮との類似を述べ、王六児もまた鉄棍を影とするとしている。ここでは一応陳敬濟を指すものとして、このように訳した。

(32) 原文「敗莖不耐風霜、故至嚴州、而鐵指甲一折卽下」（寓意説二丁裏～三丁表）。第九十二回回評に「夫嚴州者、嚴霜也。今此一入、雪上加霜、不全根披剝、將安往哉」（回評一丁表）とある。「鐵指甲」は楊二郎の綽名。第九十二回回評に「鉄指甲楊二郎、枯柳枝也、糶夙賣雨、夫柳枝、當嚴冬之時、其穿破爛之芰莖、何难之有」（回評一丁裏）とある。「鐵指甲一折」が何を指すのかは量り難いが、第九十二回で陳敬濟が孟玉楼に訴えられて牢に入っている間に楊二郎が陳敬濟の仕入れた品物を持ち逃げしたことを指すものと考えて、このように訳した。

(33) 原文「幸徐對相救、風少勁卽吹去矣」（寓意説三丁表）。厳州で孟玉楼に訴えられた時、太守の徐對が陳敬濟を助けている（92回）。第九十二回回評に「幸有徐對救命。夫對者、夙也。徐夙者、言雖有雪上之霜、幸而夙威不急、猶可踉蹌支吾于徐夙之下」（回評一丁表）、同回夾批にも徐對に関して「雖是朔夙、猶是冬天晴和之夙、故殘芰得少留也」（本文九丁裏）とあり、徐對は風を寓意すると捉えられている。

(34) 原文「次後過街鼠尋風、是眞朔風」（寓意説三丁表）。「過街鼠」は張勝の綽名。第九十九回の陳敬濟が張勝に殺される場面の本文に、「不

防張勝揺着鈴、巡夙過來」（本文七丁裏）という記述がある。

(35) 原文「風利如刀、刀利如風、殘枝敗葉、安得不催哉」（寓意説三丁表）。「催」は、前掲『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』六頁、黄霖編『金瓶梅資料彙編』（中華書局、一九八七）六十頁は「摧」としている。「催」では意味が通じないので「摧」として訳した。

(36) 原文「其父陳洪、已爲露冷蓮房墜粉紅、其舅張團練搬去、又荷盡已無擎雨蓋」（寓意説三丁表）。「其父陳洪、已爲露冷蓮房墜粉紅」については、杜甫「秋興八首　其七」に「波漂菰米沈雲黑、露冷蓮房墜粉紅」とある。また第八十二回回評に「至于陳洪、蓋言殘紅」（回評二丁表）とある。「其舅張團練搬去、又荷盡已無擎雨蓋」については、蘇軾「贈劉景文」に「荷盡已無擎雨蓋、菊殘猶有傲霜枝」とある。第八十六回回評に「張團練、喻荷蓋之猶張也。今雪壓陳莖之芰、宜乎團蓋不能復張、故下文張團練、卽與敬濟分矣」（回評一丁表）とある。父親は死に（88回）、母方の叔父も引っ越して行ってしまい（88回）、陳敬済にとって頼れる人がいなくなったという意味と考え、このように訳した。

(37) 「風雨」は、前掲『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』六頁及び前掲『金瓶梅資料彙編』六十頁では「風雪」としている。

(38) 第七十回回評に「夏延齡、實始終金蓮者也。蓋言蓮茂于夏、而龍溪有水，可以栽蓮」（回評一丁表）とある。

(39) 原文「總言水枯蓮謝、惟餘數莖敗葉潦倒汚泥、所爲風流不堪回首、無非爲金蓮汚辱下賤寫也」（寓意説三丁表）。

(40) 原文「侍女偷金、蓮瓶相妬」（寓意説三丁表）。李智と黄四が持って来た四個の金の腕輪を官哥に付けさせて遊ばせているうちに一個がなくなり、日頃から李瓶児を嫉妬していた潘金蓮がそれをあてこすったために西門慶に怒鳴られる（43回）。腕輪は夏花（李嬌児の侍女）が盗んだことがわかるが、その後李瓶児は潘金蓮の嫉妬がひどいことを呉銀児にこぼしている（44回）。

(41) 原文「闘葉輸金、蓮花飄萎、芰莖用事矣」（寓意説三丁表）。陳敬済と西門大姐とがハンカチを買う金を失くしたと言い争っており、李瓶児が潘金蓮と西門大姐の分もまとめてハンカチの代金を陳敬済に渡した。潘金蓮は李瓶児の財力を見せつけられて形無しとなった。結局失くしたと思った金は見つかっており、その金をかけてカルタ遊びをすることとなった（51回）。

(42) 原文「寫一金蓮、不足以盡金蓮之惡、且不足以盡西門、月娘之惡、故先寫一宋金蓮、再寫一王六兒」（寓意説三丁表～裏）。「宋金蓮」について、前掲『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』七頁では「宋金蓮」、前掲『金瓶梅資料彙編』六十頁は「宋蕙蓮」としている。宋蕙蓮（詞話本では宋恵蓮）は元の名を金蓮といったが、来旺（西門家の下男）と結婚した際に蕙蓮と改名した。また潘金蓮の排行は六番目で、六姐と呼ばれている。宋姓の金蓮（もう一人の潘金蓮たる宋蕙蓮）、王姓の六児（もう一人の潘金蓮たる王六児）という意でこのように記述したとも考えられる。

(43) 原文「望子落、簾兒墜、含羞自縊」（寓意説三丁裏）。「望子落」が何を指すのかは未詳。「旺」と「望」を通じさせて、来旺が原籍地の徐州へ送られたことを連想している可能性もある。

(44) 李桂姐は西門慶が官位を得たと知り、第三十二回で呉月娘の義理の娘にしてもらっている。同回回目は「李桂姐趨炎認女　潘金蓮懷嫉驚兒」である。

(45) 第二十一回回目は「吳月娘掃雪烹茶　應伯爵替花邀酒」。月娘が喜ぶとは、呉月娘の思惑どおり西門慶と仲直りできたからだと思われる。張竹坡は、呉月娘が雪の夜に香を焚いていたのは王姑子の入れ知恵によるもので、わざと西門慶に見せるようにやったのだとする。同回回評に「然則燒香一事、殆王姑子所授之奸謀、而月娘用之而效」（回評三丁表）とある。第七十七回回目は「西門慶踏雪訪爰月　賁四嫂帶水戰情郎」。同回夾批に「又有月無桂、是冬月非秋月。可想月娘當爲含悲矣」（本文八丁裏）とある。「有月無桂」とは、李桂姐が西門慶の寵愛を失ったことを指すと思われる。

(46) 月と簫とは似合いの組み合わせで、「月下吹簫」（寓意説四丁表）は画題にも使われている。

(47) 兎とは小玉（呉月娘の女中）を指す。第九十五回回評に「蓋小玉者、月中之兎、今與中秋同事月娘。夫月至中秋、兎已肥矣、兎至肥時、月亦滿矣、（略）是故小玉纔成婚、乃中秋月滿之時」（回評一丁裏）とある。

(48) 原文「蓋月照金鈎于南瓦上、其虧可見」（寓意説四丁表）。第九十五回回評に「而平安已偸金鈎于南瓦子内、蓋纔滿一夜早已如鈎照南瓦子上也」（回評一丁裏）、同回夾批に「月照南瓦、已爲殘月、况南照必在北、北方乃死而復蘇之方、月娘能不歸雲裡手之夢乎」（本文三丁表）とある。「鈎」は、小野忍・千田九一訳『金瓶梅（下巻）』（平凡社、一九七二）で「釣り手」と訳されているのに従う（同書四一〇頁ほか）。

(49) 第百回で呉月娘と小玉は、金兵の攻撃を避けて済南府の雲裡守の元へ一緒に逃げて行っている。その途中で普静和尚に再会し、永福寺に泊めてもらう。そこで呉月娘は雲裡守の夢を見、孝哥が幻化される。後に呉月娘は玳安・小玉夫妻に老後の面倒を見てもらい、生涯を終える。

(50) 原文は「李嬌兒乃桃李春風墻外枝也」（寓意説四丁表）。これが何を指すのかは未詳。第七回回評に「以李嬌兒名者、見得桃李春風墻外枝也」（回評五丁裏）とある。王實甫『西廂記』第三本第一折にも「你看人似桃李春風牆外枝、又不比賣俏倚門兒」とあり、「牆外枝」は妓女を喩えている。李嬌児も妓女出身である。李嬌児は、西門慶の死後こっそり財産を運び出して廓に帰っており、この意を含むとも考えられる。

(51) 原文「其弟李銘、言理明外暗、可發一笑」（寓意説四丁表）。「李銘」と「理明」を通じさせている。

(52) 原文「至賁四嫂、與林太太、乃葉落林空、春光已去」（寓意説四丁表）。「葉落」とは賁四嫂（本名は葉五児、年増の女性とされている）、「林空」とは林太太（潘金蓮が少女時代に奉公していた王招宣の未亡人）を指す。第七十八回回評に「又找葉五兒一段、點明花殘葉落之故也。再戰林太太、却先寫業五兒、言敗葉辞林、春光去矣」（回評一丁表～裏）とある。

(53) 原文「西門慶將至其家、必云吩咐後生王顕、是背面落水、顕黄一葉也」（寓意説四丁表）。「王」と「黄」を通じさせている。

(54) 原文「文嫂住捕衙厒前、女名金大姐、乃蜂衙中一黄蜂」（寓意説四丁表）。蜂衙とは、官吏が一斉に出勤してくるのを蜂の群れに喩えたもの。第九十五回回評にも「文嫂者、蜂也。其女兒金大姐者、黄蜂也」（回評二丁表）とあるが、金大姐は薛嫂の息子の嫁であり、この部分の記述は物語の内容と食い違っている。

(55) 原文「雪月爭寒、空林葉落、所爲蓮花芙蓉、安能寧耐哉」（寓意説四丁裏）。「雪月爭寒」については、第六十八回回評の「此回特寫爰月、却特與桂姐相映、見此時有月無花、一片寒冷天氣也」（回評一丁表）、「桂姐爲月娘之女、月下桂也。今月兒奪桂兒之寵、引林氏之媒、明言桂已飄零、月非秋月。蓋雪後之明蟾、獨照空林、大是凄切之情」（回評二丁表）、第七十七回回評の「寫殘葉、必寫先踏雪訪爰月何也。蓋必雪月交輝、而蓮葉始全落空、梅花乃獨放也」（回評一丁裏）などの記述により、西門慶が雪を踏んで鄭愛月の廓へ行ったことをいうものと思われる。「所爲蓮花芙蓉、安能寧耐哉」については、第七十回回評に「且東京一回之後、惟踏雪訪月、而葉落空林、景物蕭條、是又有賁四嫂、林太太等事也。此處于瓶兒新死、卽寫夏大人之去、言金蓮之不久也。用筆如此、早瞞過千古看官、我今日覩之、乃知是一部『羣芳譜』之寓言耳」（回評一丁裏）とある。なお『群芳譜』は、植物の栽培法及び関連する詩文などを集めた類書で、明の王象晉編『（二如亭）群芳譜』及び清の康熙年間に勅命でこれを増删した『廣群芳譜』を指す。古来、花は女性に喩えられるので、『金瓶梅』を『群芳譜』に喩えたものと思われる。『廣群芳譜』は康熙四十七年（一七〇八）撰成なので、張竹坡はこれを見ていないだろう。

(56) 第五十五回回評に「舊日韶光易老、甚勿昧昧、及早回頭、猶恐不及也。（略）此乃用送鴻迎燕四字、以點其睛、示炎熱有限、繁華不久也」とある（回評一丁表～裏）。

(57) 原文「來爵改名來友、見花事闌珊、燕鶯遺恨」（寓意説四丁裏）。第七十七回夾批に「花之友者雀也、雀來而花謝矣」（本文十三丁表）とある。また第七十七回回評に「鳥來而花殘、况黄鸝乃四月之鳥、春已歸

矣。故來友兒自王皇親家出來。夫王皇者、黄也、離王皇親而來、此黄鸝也。改名來爵、爵者、雀也、古雀字卽爵、總是作者收拾花事之筆」（回評二丁表～裏）とある。「燕鶯遺恨」については、前後の関係から、色事が衰えるということだと思われる。

(58) 原文「其妻惠元、三友會于園、看杜鵑啼血矣」（寓意説四丁裏）。第七十七回回評に「夫三友、乃花間之雀鶯燕等鳥也」（回評二丁表）とある。「三友會于園」とは、鳥が来て花がしおれ、色事が衰えるという意味かと推測される。注(57)参照。「惠元」と「會園」を通じさせるものか。「看杜鵑啼血矣」が何を指すのかは量り難い。ホトトギスは口中が赤いことから、鳴く様子が血を吐くと喩えられる。またホトトギスは古代の蜀の望帝杜宇の魂が化した鳥だという伝説があり、その鳴き声は聞く者に哀切な気持ちを起こさせるといわれる。

(59) 原文「故三章約乃陽関声」（寓意説四丁裏）。「陽関声」は送別の曲。王維「送元二使安西」。「勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」から陽関曲と呼ばれる。玉簫は書童との関係を潘金蓮に見つかり三つの約束をさせられるが、そのことを知った書童は、恐れてすぐさま船で故郷の蘇州に逃げ帰ってしまい、玉簫と別れることとなった（64回）。

(60) 西門慶は呉月娘に、自分の死後も妾達が西門家を出て行くことなく一緒に暮らすよう遺言したが（79回）、結局妾達は皆出て行ってしまったことを指すものか。注(71)参照。

(61) 「蜂媒蝶使」（恋文を届ける人、色事の手引きをする人）の意と思われる。第九十五回回評に「玳安者、蝴蝶也。覘其嘻遊之巷可知。覘其訪文嫂兒可知。文嫂者蜂也。（略）蜂媒、蝴蝶使可訪。故用玳安。玳者、墨班黄班、所謂花蝴蝶也」（回評二丁表）とある。

(62) 第三十五回で応伯爵が書童の歌声について「你看他這喉音、就是一管簫」（本文十六丁表）と言っている。

(63) 原文「惟風則止有馮媽媽。太守徐尉、雖亦一人、而非花嬌月媚、正經脚色」（寓意説四丁裏～五丁表）。この「風」は風流（色事）の意を含むと思われる。徐尉は清廉な人柄とされ、色事に関する記述は見当たらないが、馮媽媽は色事に関係する役回りで、輿入れ前の李瓶児と西門慶との間で使いをしたり（19回）、韓愛姐を翟謙（蔡太師の執事）の妾とする話を持ち込んだり（37回）、王六児と西門慶との逢引きの手伝いをしたりしている（37回ほか）。

(64) 原文「故用書童與玉簫合、而蕭疎之風動矣」（寓意説五丁表）。蕭疎とは、木の葉などが落ちて寂しげでまばらであること。「蕭疎之風」とは、蕭条とした風であり、登場人物が去ってゆく風の意か。注(66)(71)参照。「簫書」と「蕭疎」を通じさせているものと思われる。

(65) 原文「故書童生于蘇州府長熟縣、字義可思」（寓意説五丁表）。第三十一回本文の記述では「本貫蘇州府常熟縣人」となっている（本文五丁表）。「字義可思」の意は未詳。「長」と「常」が同音であることからいうものか。

(66) 第三十五回本文「畫損了掠兒稍」の直後の夾批に「已寓逃走消息、然又道出本意」（本文十六丁表）とある。

(67) 第三十五回本文「賁四果然害怕」の直後の夾批に「有梳篦應害怕」（本文二十四丁表）とある。

(68) 第三十五回で賁四は酒の席での失言を応伯爵に指摘され、いたたまれず席を立ち、怖くなって、後で銀を包んで応伯爵の家に挨拶に行ったことを指すと思われる。

(69) 原文「『艶異』遺意、爲男寵報仇」（寓意説五丁表）。『艶異編』は王世貞編纂の文言小説集。艶と異に関する話を収録し、巻三十一「男寵編」がある。「爲男寵報仇」については、前文の応伯爵が賁四を咎めた件は誰かの仇を討ったものとは思われないので、西門慶が平安を打って書童のために仇討ちをしてやっていることを指すものと考え（第三十五回回目は「西門慶爲男寵報讐　書童兒作女粧媚客」）、このように訳した。

(70) 前掲『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』の注によれば、「象牙」「牙梳」は、表面上の意味は可愛がっている者（書童）のことだが、西門慶の男根を暗喩しているという（同書五六八頁）。

(71) 原文「去必以并兒喪内、瓶墜簪折、牙梳零落、蕭疎風起、春意闌珊、陽関三叠、大家將散場也」（寓意説五丁表）。「瓶墜簪折」は、李瓶児

の死を指すと思われる。第六十二回で李瓶児が死んだ時に応伯爵と西門慶は簪が折れた夢を見ている。注(19)参照。李瓶児の死（政和七年九月十七日）後百日余りで西門慶も死に（重和元年一月二十一日）、西門家の人たちが離散していくことを指すと思われる。文頭の「去」は、西門慶の死去を指すともとれるが、前後の関係から一応このように訳した。注(60)(64)参照。

(72) 原文「至其寫玉楼一人、則又作者經済學問、色色自喻皆到」（寓意説五丁表）。「竹坡閒話」（以下閑話と略す）に「夫終不能一暢吾志、是其言愈毒、而心愈悲、所謂「含酸抱阮」、以此固知玉樓一人、作者之自喻也」（閑話一丁表）とあり、孟玉楼は作者が自分自身を喩えて書いた登場人物だと捉えられている。注(97)参照。

(73) 孟玉楼の簪には「金勒馬嘶芳草地　玉楼人醉杏花天」（第八回本文七丁裏）と彫り込んである。これについて田中智行訳『新訳金瓶梅（上巻）』（鳥影社、二〇一八）の注に「この対句は宋代の伝奇小説「李師師外伝」に徽宗が画工に与えた画題としてみえるのが古く、後の戯曲や小説にも用例がある」（同書一六五頁）とある。筆者が見たかぎりでは、石君寶「李亞仙花酒曲江池」、『水滸傳』第百一回、『清平山堂話本』「西湖三塔記」にも用例があった。

(74) 第七回回評に「語有云「玉楼人醉杏花天」、然則玉楼者、又杏花之別説也」（回評二丁表）、第九十一回回評に「薛嫂舊媒、陶媽新媒。夫桃傍之雪、乃是杏花之色、非若前此之雪壓枝頭以相欺也」（回評一丁表）とある。

(75) 孟玉楼が前に嫁いでいた楊家は臭水巷にあった。夫楊宗錫の死により、西門慶の妾となったことをいうものか。

(76) 閑話に「作者不幸、身遭其難、吐之不能、呑之不可、搔抓不得、悲號無益、借此以自泄」（閑話二丁裏）とある。

(77) 原文「所爲勿助勿忘」（寓意説五丁裏）。『孟子』「公孫丑章句（上）」の「必有事焉。而勿正。心勿忘。勿助長也」によると思われる。

(78) 原文「言我若得志、必以仁道済天下、使天下匹夫匹婦、皆在晏安之内、以養其生、皆入于人倫之中、以復其性」（寓意説五丁裏）。

(79) 原文「不謂有金道士淫之、又有陳三引之、言爲今人声色貨利浸淫已久、我方竭力養之教之、而今道又使其舊性復散、不可救援」（寓意説六丁表）。「金道」と「今道」、陳三の「三」と「散」を通じさせている。第九十三回で晏公廟の金道士が陳敬済に男色を迫り、陳三が陳敬済を廓に引き入れて、馮金宝（かつての恋人）と再会させ、陳敬済は自堕落な生活に逆戻りしている。

(80) 原文「一肖其形、一美其號」（寓意説六丁表）。胡僧の姿形について、第四十九回本文に「形骨古怪、相貌搊搜、生的豹頭凹眼、色若紫肝、戴了鷄蠟箍兒、穿一領肉紅直裰、頦下髭鬚乱拵、頭上有一溜光簷、就是個形容古怪眞羅漢、未除火性獨眼龍」（本文十二丁裏～十三丁表）とあり、この描写は男根を彷彿とさせる。胡僧の姿形は男根に似ており、道堅はそれを美しく言っただけだ。

(81) 万廻長老の「廻長」と「廻腸」を通じさせている。廻腸は内臓の名前であると同時に、あれこれ思い悩むという意味もある。

(82) 相火は中医学用語で、憤怒や色欲によって肝・腎に火を発して起こる病気。第七十九回の西門慶が死ぬ場面に「相火燒身、変出風來、声若牛吼一般、喘息了半夜」（本文二十五丁表）とある。「相國」と「相火」を通じさせるものか。

(83) 脾風は中医学用語で、風病（寒熱病）の一種。「避風」と「脾風」を通じさせるものか。

(84) 原文「故有吳道士主持結拜、心既無道、結拜何益」（寓意説六丁裏）。「吳道」と「無道」を通じさせている。

(85) この四人に共通するのは、遊び人ということだと思われる。

(86) この三人に共通するのは、水だと思われる。

(87) 原文「又如安沈（枕）、宋（送）喬年、喻色慾傷生、二人共一寓意也」（寓意説六丁裏）。前掲『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』の注によれば「安沈」は「安忱」の誤り（同書十一頁）。安忱・宋喬年については、第七十七回回評に「夫安郎中名忱、言安枕也。宋喬年、言断送長年也」（回評一丁表）とある。また第七十二回回評に「寫安沈來拜、處處在西門飲酒赴約之時。蓋屢屢點醒其花酒叢中、安枕無憂、不知死之

將至、正是作者所以用安沈一人入此書之本意也」（回評二丁表）とある。

(88)「傅（負）自新（心）」の原文は「付（負）自新（心）」（寓意説七丁表）。また、韓道国について魏子雲氏は「寒到骨」の意としている（前掲『金瓶梅審探』、八十七頁）。

(89) 原文「如吳神仙、乃鏡也。名無奭、冰鑑照人、無失也」（寓意説七丁表）。「無奭」と「無失」を通じさせている。

(90) 原文「并墜簪折、黄土傷心」（寓意説七丁表）。「并」は「瓶」の略。「并墜簪折」とは、李瓶児の死を指す。注(19)(71) 参照。黄真人は李瓶児の三十五日の法事に招かれる道士（66回）。

(91) 原文「彩雲易散」（寓意説七丁表）。美しい物は壊れ易い、良い事は長く続かないという意。第二十六回の宋蕙蓮が自縊した場面の本文にも「世間好物不堅牢、彩雲易散瑠璃脆」（本文十八丁裏）とある。白居易「簡簡吟」の「大都好物不堅牢、彩雲易散瑠璃脆」をふまえると思われる。

(92) 原文「潘道士、拚也」（寓意説七丁表）。「潘」と「拚」を通じさせているものか。潘道士は、死にそうな李瓶児のために西門慶が魔除けを依頼する道士（62回）。

(93)「達」はお父さんの意。「達達」は『金瓶梅』中では、枕を交わす際に女性が男性に呼びかける語として使われている（張惠英『金瓶梅俚俗難詞解』、社会科學文獻出版社、一九九二、五十二頁）。

(94) 原文「桂姐接丁二官、打丁之人也」（寓意説七丁表）。第二十回眉批にも「打丁也者、故姓丁也。文字隨手成趣」（本文十六丁表）とある。打丁については未詳。そのまま「打丁の人」とした。

(95) 原文「侯林兒言樹倒猢猻散」（寓意説七丁表～裏）。ボスが倒れれば他の者も散ってしまうという喩え。「侯」と「猴（サル）」が同音であることや、「樹」と「林」の関連から連想するものか。侯林児は第九十六回で登場する。

(96) 張好問と白汝晃はいずれも第三十三回に登場する。白汝晃は、詞話本では謝汝謊となっている。

(97) 第七回で孟玉楼は月琴が上手だと紹介されている。第百回で韓愛姐は月琴を抱いて湖州の両親の元へ旅をしている。旅の途中で難儀していたところを韓二に助けられる。張竹坡は月琴と阮咸を同じものとして評している。注(72) 参照。

(98) 原文「乃于爰河中搗此一篇鬼話」（寓意説七丁裏）。何官人の「何」と「河」を通じさせている可能性もある。

(99) 閑話に「是吾既不能上告天子以申其隱、又不能下告士師以求其平、且不能得急切應手之荊、聶以濟乃事、則吾將止於無可如何而已哉。（略）展轉以思、惟此不律可以少泄吾憤、是用借西門氏以發之」（閑話一丁裏）とある。

(100) 原文「惟孝可以永錫爾類」（寓意説七丁裏）。『詩經』「大雅・既醉」に「孝子不匱、永錫爾類」とある。

(101) 原文「今使我不能全孝、抑曾反思爾之于爾親、却是如何」（寓意説七丁裏）。

(102) 原文「千秋萬歲、此恨綿綿」（寓意説七丁裏）。白居易「長恨歌」に「天長地久有時盡、此恨緜緜無盡期」とある。

(103) 原文「悠悠蒼天、曷有其極」（寓意説七丁裏）。『詩經』「唐風・鴇羽」に「悠悠蒼天、曷其有極」とある。

(104)「作者之意」以降の二二七字の文章は、第一奇書本の多くの版本では収録されていない。底本の序言によると、この二二七字を持つのは大連図書館蔵の本衙藏板翻刻必究本、張青松蔵本、韓国梨花女子大蔵本の三本で、大連図書館蔵本及び張青松蔵本は初印本、韓国梨花女子大蔵本は回評が無く、初印本の翻刻本か同版後印本であろうと推定されている。

(105)「仲兄竹坡傳」等の資料によると、張竹坡は十五歳の時に父親の張翅を亡くしている（前掲『張竹坡與《金瓶梅》研究』、七十四頁）。

(106) 原文「向日所爲密邇知交、今日皆成陌路」（寓意説八丁表）。「密邇」は接近していること。『國語』「魯語・下」に「魯之密邇於齊而又小國也」とある。

(107) 原文「細思床頭金盡之語」（寓意説八丁表）。張籍「行路難」に「湘東

行人長嘆息、十年離家歸未得。（略）君不見、牀頭黄金盡、壯士無顔色」とある。

(108) 原文「親朋白眼、面目寒酸、便是凌雲志氣、分外消磨」（寓意説八丁表）。第一回の本文中に同じ表現が見られる（本文二丁表）。

(109) 冷熱真仮の交替については、閑話に「天下最眞者、莫若倫常、最假者莫若財色。然而倫常之中、如君臣、朋友、夫婦、可合而成、若夫父子、兄弟、如水同源、如木同本、流分枝引、莫不天成。乃竟有假父、假子、假兄、假弟之輩。噫。此而可假、孰不可假。將富貴、而假者可眞、貧賤、而眞者亦假。富貴、熱也、熱則無不眞、貧賤、冷也、冷則無不假。不謂冷熱二字顚倒眞假一至于此。然而冷熱亦無定矣。今日冷而明日熱、則今日眞者假、而明日假者眞矣。今日熱而明日冷、則今日之眞者、悉爲明日之假者矣」（閑話二丁表～裏）とある。

(110) 本月とは何時かについては説が分れる。王汝梅氏は序の日付と同じ三月とする（前掲『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』、八頁）。呉敢氏は、「仲兄竹坡傳」に「十数日で批評を完成した（旬有餘日而批成）」（前掲『張竹坡與《金瓶梅》研究』、二四七頁）とあることから正月とする。

（あべ　ひろこ　文学研究科文学専攻博士後期課程）
（指導教員：中原　健二　教授）
二〇一八年九月二七日受理